# 上宮寺通信

第五十七号

## 五つの畏れ（不安）

新型コロナウィルス感染症が第五類に移行されることになりました。この三年間、私たちの生活は本当に新型コロナに翻弄されました。しかし、この騒動を単に災難とするのか、私たちのあり方を考える縁とするのか、これからの生き方が大事になってくると思います。

仏教では人間は五怖畏（①不活の畏れ②死の畏れ③悪名の畏れ④悪趣の畏れ⑤衆威徳の畏れ）といわれる五つの畏れ（不安）を抱えて生きていると教えます。

①の「不活の畏れ」とは経済的な畏れ、将来食べていけるのだろうかという不安です。新型コロナで経済的にもかなりのダメージを受けました。私たちの生活に物価高や品不足などで様々な影響が出ていますので、この不安を抱えている人は多いと思います。

②の「死の畏れ」は文字通り死への不安です。「早くお迎えが来てほしい」と言っている人もいるかもしれませんが、今すぐにお迎えが来るのは嫌というのが人間です。新型コロナが出てきた当初、罹ったら死んでしまうのではないかという不安がありました。

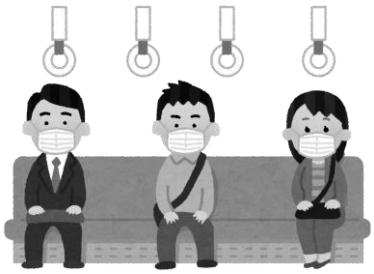
③の「悪名の畏れ」とは悪口への不安です。人から悪く思われるのは嫌、良い人としてみられたいのが私たちです。三密を避ける、マスクや手指消毒をするということをしっかり守ってきたのは、ウィルス感染予防もありますが人から悪く見られたくないという一面もあるのではないでしょうか。

④の「悪趣の畏れ」とは地獄へ落ちるのではないかという不安です。地獄というのは「孤独にして同伴者なし」（源信僧都）といわれる世界で独りぼっちの世界です。人との関わりを制限された中では、孤独という不安も生じました。

⑤の「衆威徳の畏れ」とは人と違ったことをすることへの不安です。マスク着用は個人の判断となりましたが、なかなかマスクを外せない。ウィルスへの不安というより周りからどう見られるのかが心配ということがあります。③の「悪名の畏れ」に通じるものがあります。

この五つの畏れ（不安）はどこから来るのか。原因は自分の外にあるのではありません。すべて「自分が一番大事。私の思い通りにしたい」という自我が生じさせるのです。

三年間にわたる新型コロナ騒動は「世の中は人間の思う通りにはならんぞ」という警告だったのかもしれません。



お仏壇の掃除をすると、「この仏具はどこに置けばいいのだろう?」とわからなくなることはありませんか。それぞれの家によってお仏壇の大きさや形が違いますが、必ず燭台、香炉、花瓶（かひん）の三具足はあると思います。

まず真ん中に香炉を置きます。向かって右が燭台、左が花瓶となります。真宗大谷派では燭台は鶴亀の形、花瓶は鰭（ひれ）の付いたもの、香炉は上卓に火舎香炉、前卓に土香炉が正式とされています。よくわからない時はご相談ください。

## ◆話題あれこれ

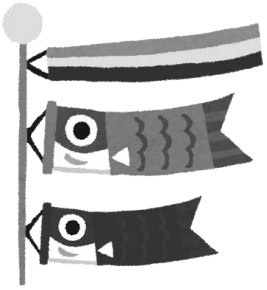
○4月8日に京都・東本願寺で勤められた慶讃法要で舞楽が行われました。そこで火焔太鼓を打たせてもらいました（右の写真）。

本山の火焔太鼓は3メートルぐらいある巨大なもので立って打たなければいけません。太鼓が巨大ならば撥（ばち）も巨大。太鼓を打つとドーンとお腹に響くような深く重い音がします。終わった時には緊張もあってヘトヘト。

でも、一生に一度の貴重なご縁をいただけました。

○7月18日（火）午後2時より、名古屋を中心に活動している落語家、登龍亭獅鉄さんの落語会を上宮寺本堂で行います。「名古屋市全16区落語ツアー」と題して、各区の様々な場所で落語を行うとのことです。その会場の一つが上宮寺になりました。ひとり五〇〇円で15席限定と案内しています。もしご希望があれば席を確保しますのでご連絡ください。

○5月は一年で一番過ごしやすい時期ですが、じきにうっとうしい梅雨の季節がやってきて暑い夏がやってきます。夏を乗り切る体力を今のうちからつけておきましょう。



**【雑感】**

先日、慶讃法要記念として大谷派教誨師会主催の公開講座が東本願寺で開かれました。講師は俳優の宇梶剛士さんで「転んだら、どう起きる」と題してお話をいただきました。いまでも悪役などが多い宇梶さんは少年の頃、暴走族の総長にまでなり関東では一番有名な不良だったとのこと。少年院にも収容され自暴自棄になっていたそうです。そんな宇梶さんがどうして立ち直ることができたのか。それは「信じてくれる人」がいたから。ときおり言葉を詰まらせながらの講演でとても考えさせられる話でした。（住職）

【発行】
真宗大谷派
上宮寺
昭和区白金一丁目十九番十五号
☏052-871-0547